ホフマンの暗箱——書字と視覚メディア

嶋　田　由　紀

カメラの登場前夜に相応しく，1815年に書かれたE. T. A. ホフマンの『砂男』は，物語り全体が，外部を見通すことの出来ない暗箱となっている。この暗箱の中で，主人公ナタナエルが自らの位置の相対化もままならないまま，外部からやってくる他者すなわち「砂男」の存在を認めるカメラ・オブスクラ的思考から，一切の外部を想定しないラテルナ・マギカ的それに移行する様子が認められる。

前者の思考形態において，ナタナエルは他者の存在を画像で示すこと望みながらも，手紙という手段を用いるが，友人ロタールに宛てたはずの手紙が恋人クララの手に渡り，しかも出した手紙の内容を解釈しなおされることによって，彼に書字を介しての直接性の希求を挫折させることになる。ナタナエルの目指す直接性とは，無媒介を意味するのではなく，自らのうちにあるイメージをそのまま相手に十全に伝えることである。したがって，手紙という手段をあきらめ，クララとロタールに会うため，彼が郷里へ向かったのは，書字の媒介を嫌う音声中心主義の故にではなく，書字から紡ぎ出される無限の意味連関が生み出す物理的距離を断ち切ろうとする，きわめて視覚的な試みだったのである。よって，書字の意味内容を問うのではなく，シニフィアンとしての書字を語りかける相手との間に流通させることに，次なる彼の欲望が向けられる。クララに拒絶されてしまった，書物を読み上げる間にじっと眼をみつめているようにという彼の要求は，自動人形オリンピアによってはじめて満たされる。幻想の火を眼に灯した彼は，眼の中にナルシスティックな自我の欲望を投射し，それを眺めることによって自己を回収していく。かくて，一切の他者を認めない自閉的空間が成立する。ナタナエルは相手と自分の距離の消滅を眼と眼が見詰め合うことによって手に入れたが，それは同時に外部を想定せずに内部世界だけで充足するラテルナ・マギカ的思考への移行であり，他者を排除することであった。

自分の眼をプロジェクターに，オリンピアの眼をスクリーンにみたて，意味なき書字たちを回転させるナタナエルのあり方は，この意味なき書字たちが画像にとってかわり，すばやく通り過ぎて行く後世の装置，すなわち映画を先取りしていたといえる。ただ，映画館を訪れる観客は対象と距離を保つことを学んだのに対し，それができなかったナタナエルは，オリンピアの眼を胸に投げつけられたことで発狂し，ついには市庁舎の塔から身を投げ，死という犠牲を払って自らを地面に密着させなければならなかったのである。